

胆石

中勘助

青空文庫

昭和十五年十月四日

姉の病気のため五月末から外へ出ず、もう大丈夫となつてからもやはり気がかりなので余儀ない用事の場合月に二、三度、それも見舞の人に留守を頼んで出たついでに日にあつてくるぐらいが関の山だつた。しかし近頃では姉もよほどよくなつたし、これから少し散歩をしようと思つてゐるうちに今度は自分が病氣になつてしまつた。八月二十九日発病、胆たんせき一石。そのまえからひとの原稿を見てたのが二、三日ひどく大儀になつて机にむかう気になれず、籐とうの枕をして寝ころんだまま読んだ。それを性来嫌いな暑さのためと思い、また永い間の看護や心労、執筆につづいての読書や詩作、それらの疲労が重なつたのだろうとも思つていた。それもあつたかもしれないが既に体の調子が悪くなつたのではあるまいか。二十九日の晩飯は食欲が進んでふだんよりよほど多く食べた。食後間もなく兄の碁の相手をして、暫しばらくすると胸がつかえてきた。たべすぎのうえの碁のせいだろうと思つて消化薬をのみ書齋へあがつて長椅子に横になつたが、過食のためならじきらくになるはずのところ反対にだんだんひどくなる。水おちのへんがはちきれそうだ。私は皆より先に二階で床についた。そして胸をさすつたり、寝返りをしたり、起きあがつたり、いろいろ

やってみても一向かわりがない。そのうち下の人たちも寝てしまった。苦痛はますます烈しくなる。横になっても、仰向いても、椅子に腰かけても、どうにもならない。しまいには蚊帳かやのまわりを歩きまわってまぎらそうとする。そのじぶんにはただのつかえではないと気がついた。が、胃潰瘍いはいようの痛みでも、盲腸炎のでもないらしい。診察とは思ってもう遅くもあるし、頭を悪くした姉を夜中におこして心配をさせたくない。どうかして朝までと必死にこらえる。そのうちふと胃にたまってるものを出してしまおうと考えついた。洗面所へおりていつて器のなかへ吐く。血液らしいものはみえないけれど食物はほとんど消化していない。胃がからっぽになったらいいまでもどしてもちつともらくにならない。苦痛はまったく別のところからくるらしい。それからまた寢床てんてんへもどり転てんとしてるうちに疲労の極とろとろとして目をさましたら夜が白んでいた。私はとうとうたまりかねて下へおり姉を起して近処の先生をよんでもらった。その薬で胸の裂けそうな苦痛はよほど和やわいだものの全体の気分はすこしもよくなるらない。□□先生に電話をかける。午後来てくださるといふ返事だった。床を下の次の間へうつす。病気の程度によって看護の都合上そういう習慣になっている。

ひる過ぎ間もなく御来診。苦痛の長びいたのに比べて病名は無造作にすぐきまった。胆

石です といつて、出てしまえばなんでもないと腹部をあちらこちら ここはどうですとおさえられるのが^{まじ}的にあたつて痛い。苦しさにまぎれて見もしなかったが肝臓のへんが^は脹れてるらしい。絶食、湿布ということになって先生は帰られた。姉が湿布をしてくれる。そういうことは慣れてもいるし上手だけれど病後のことで気の毒でもあり、心配でもある。××が薬をとつてくるのをもどかしく待つうちにいつかうとうとしたらしい。横向きになつて背中のほうに人の気はいがしたので首をねじむけてみたら「^{せみ}蟬」だった。来るはずになつてたのだが知らないうちに坐つてたとみえる。

「とても苦しいんだよ」

私はめつたにない弱音^{よわね}をはいた。その苦しさがゆうべからのとちがつてきた。身動きするのにも息をするのも苦しい。そんな風で一夜があけた。

先生のお世話で看護婦さんがきてくれた。△△さんという健康の化身みたいな人だった。看護の都合上次の間から座敷へもう一度移ることになり、そちらに別の床がのべられた。こうして私が座敷へ寝るようになったらもうおしまいなのだ。三日や五日で起きられないときに限る。三人がかりで寝てる床をひっぱり新規の床へびたりとつけた。あとは自分で転がってかわらなければならぬ。それ以外の方法では一層患部にひびきそうな気がする。

で、私は歯をくいしばり体を廻転させてやつとこきとうつぶせの姿勢にまでなったがその拍子に思わず イタイ イタイ イタイ イタイ と悲鳴をあげた。石のつかえてるあたりだろうか、体の動きにつれてまるで体内の錆びついた歯車が無理やり逆に廻されるような痛みを感じる。私は半廻転して床と床のあいだのへんに下をむいたまま両方に握り拳をこしらえて上体を支えている。しかしいつまでもそんな姿勢はつづけられないのでまたもや悲鳴をあげながら廻転し、仰向けを通りこして右を下に止ったときはヒーヒーいつて短い息をはずませた。吸い込むたびに痛むので息が半分しかできない。歯車の歯が折れてしまいそうだ。そのままぐたりとしてあがりかけた魚みたいに喘いでいる。

これから以下は病床日誌を参照しながら書く。朝、昼、晩と水蜜桃の汁をしぼって百グラム乃至百二十グラムくらい吸いのみでのむ。——葛湯の百五十グラムは味がなかった。——水蜜は本場のを貰ったのが冷蔵庫で種まで冷えている。こんよりと底澄みのしたきめの細かいその果汁はさながら崑崙の玉を溶かしたかのようにみえる。それはえならぬ薫りと舌をとろかす甘みをもちながらしかも卑しい人肌の温みのない西王母の乳である。仙女の恵みの露はしんしんとして指の先までもしみわたる。

夕刻副院長さんがきて注射をしてくださる。

夜。よく眠る。

三十一日

苦痛も熱も呼吸の数もすこしへったが脈搏みやくはくが九十六にふえた。野菜スープは格別の印象も残らない。林檎りんごの汁は錆色さびいろに濁るのが難である。しかしその栄養価にふさわしい？コクのある複雑な味がする。私が水蜜のほうばかり望むのを△△さんはなるべく林檎にしようとする。

九月一日

朝。たいへん気分がいい。痛みも少なくなった。西瓜すいかの汁は色も安っぽく、味も水っぽくて栄養になりそうもない。元来西瓜は好きなのだけれどこうして果汁にしてみると掛け値のないところが出る。

二日

体温、脈搏、呼吸とも普通になり、食慾が非常に進んできた。きょうの果汁は西洋梨子なし。

在来の日本の果物にはない繊細な香りである。旧い時代ふるの人はこういう匂いを薬臭いといつて嫌いもしたであろう。幸い私は一時代遅く生れたためかかる異国の薫りをもめでたく賞美することができると。それは蒼白く、ほろ甘く、いみじきたきものの香につつまれたカトリックの尼僧の恋にも譬たとえようか。

三日

食欲が進んだせいもあり、ほかに所在がないのであれやこれやとちがった種類の果汁を考えては注文を出す。果物はお見舞いにもらうから人を煩わずらわして買わずとも大抵家で間に合う。だからこそ気楽に注文が出せる。病床日誌によればきょうの食事は

朝 おまじり一〇〇 桃果汁八〇

九時半 ネーブル果汁六〇

十一時五十分 馬鈴薯ばれいしょうらごし少量 トマト汁七〇

二時半 林檎果汁一〇〇

五時 おまじり一椀 大根おろし少々 梨果汁八〇

七時四十分 葡萄果汁ぶどう五〇 番茶二〇。

摘要の欄に 食慾増進あそばす。今朝はじめておまじりをめしあがってたいへんおいしそうでした とある。おまじりはほんとうにうまかった。否、うまいなぞという生やさしい言葉でいえるものではない。それは舌の感ずるただの味ではなく、その味をとおして命とつながっている。命そのものときえいえるくらい深刻無味のうまみだ。平生から私はめったにまずさを感じたことがない。米のうまみもよく知ってるつもりだった。ところが半世紀以上も味いつづけたその米の味がこれほど貴いものだと今はじめて知った。とろとろのおまじりのぬるみ、舌にすべるぬめつきさ、甘み、こく。一匙一匙が不老長生の靈薬の思である。トマトの汁はさっぱりしてるけれど鋭さがあつて果汁のような懐しみがな
い。ネーブルは食べにくいことを除けば好きな果物のひとつだが果汁には色にも味にも妙
にどぎついところがあり、どこか銀座娘を聯想させる。葡萄もはじめての見参だ。琅
玕しずくの雫かともみえる青葡萄の汁。

五日

病気のときにはよくあることらしい。仰臥ぎようがしてじつと天井を眺めると松板の手のこ
んだ木目がいろいろな生きものの形になつてみせる。先方ではおどかすつもりだろう。だ

がこちらもこの年になっては化けそうに功をへてるのだ。銀の匙の坊ちゃんとは訳がちがう。怖いどころか退屈しのぎになる。顔のまにはぬえの胴体をとったみたいに猿の頭へいきなり蛇の尻尾をつけた怪物がいる。その隣の板には眼玉ばかり大きくてそのわりに間のぬけた顔の魚が口をとがらしている。それとひとこまおいてつづきの荒波のなかを分厚な唇をもったつわものが鬚ひげを水に靡なびかせながら泳いでるのはアツシリアの彫刻にでもありそうな図だ。そのむこうには首をのばして疾走する馬の頭、次の間との境の欄間のところには平家蟹へいけがにみたいな面が二つ、平家蟹より品がなくて妖気を帯びてるのは蜘蛛くもの精でもあろうか。そのほか雁の横顔や、古生物の化石や。

寝つきがわるいでもなく、眠られないでもないにかかわらず寝るのがつまらなくて夜がなければ、はやく朝になってくれればと念じつつ目をとじる。その待ちこがれた朝がくれば雨戸があけられ、蚊帳かやがはずされて若く輝かしい「きょう」の笑顔が私を見舞う。頭のほうは見るのに苦しいので問題にならない。足のほう、北の二重のガラス障子を△△さんがあけてくれると写真機のシャッターが開かれるように四角にくぎられた外景が現れ、冷たい空気が液体みたいな輪郭をもって流れこんでくる。それが衰弱と睡眠のためにけだるく弛緩しかんした神経を澆はたら刺と生気づける。四角のなかには椎しいの木と塀外の街路樹、その枝

葉のあいだからちらほらと空がみえて、時には雀すずめの声こゑがきこえる。ただそれしきものごとよなく美しく目ざましい。私がせいせいとして新あらたにかえられた水みづに遊ぶ魚いそのように呼吸こゝろをしてるところへ△△さんが洗面器せんめんぎに湯ゆをもつてくる。そして幾たびも手て拭ぬぐをしぼつてわたす。それをうけとつて丁寧ていねいに顔かほや頸筋くびすじ、耳みみのなかなどに残のこつた夜の粘ねりをとつたのち最後に両手りょうてを、指ゆびを一本いっぴんずつ克明くつめいにふいて手拭てぬぐいをかえす。と、それをさげた△△さんはかわりに朝あさの食事しょくじをもつてくる。

きようは蜂はちみつ蜜みつをたべた。砂糖さとうは配給はいきつ、葡萄糖ぶどう糖はさがしてもなし、蜂蜜はちみつはこのあいだ姉あねにたべさせようと思おもつて方々あちこちたずねたがどこにも品切しんせつれだったのであきらめてたところほかの買物かひものにいった誰たれかが思いがけぬ店みせで見つけてきた。私は元来もとより甘党かんたうでないにかかわらず病氣びやうきのせいかしきりに甘いものがほしい。この文字もじどおりの天然てんぜんの甘露かんろは砂糖さとうとちがつて胃いにもたれることがなく、砂すなにしみる水みづみたいに吸収きゆうしゆされて五体ごたいの養やしやういとなるいみじくも貴たかいものである。どういふ訳わけか我我わがわが日本人にっぽんじんは従来じゆんらいほとんどこれを賞美しょうびしなかつたけれど、あの横よこしま縞しまの仕事しごと著つとをきた翅はねのある採集さいしふ者ものたちが四角しかく八面はつめんに飛びまわつてこここの山陰さんいん、かしこの野原のばら、花園はなづらや果樹林くわくじゆりんに咲さき乱みだれたいろいな花はなからたんねんに汲くみとつて運びかえつたこんじきの甘露かんろ、これを甜なめて蝗いなごをたべてたとすれば古いにしへのユダヤの予言者よげんしやは決して粗

食だったとはいえないであろう。慾をいえば私には紀州きしゅうから到来の蜜柑みかんの花の蜂蜜がいちばん望ましい。

六日

毎目目にみえて軽くなるとはいえ寝返りするたびに声を出すほど痛かったのがいつか忘れるようによくなった。らくに寝返りができたらなあ。これが最初の願いだった。ようやく大願成就したのだ。きょうの病床日誌の摘要欄には、始めて患部の痛みなしに深呼吸が一回できましたとある。ちらりと見たお見舞の果物の籠かごに赤葡萄の房のあったことをおぼえてた私が、今度は赤いほうを、と注文しておいたのを、栄養に気をとられた△△さんは娘が反物をよりどるような私の好みを忘れたとみえて青葡萄の果汁がずつつづいた。で、きょうまた赤いほうを催促した。△△さんは、ああそうでございましたね。どうも…： というようなことをいって赤葡萄をしぼってきてくれた。

葡萄の美酒夜光の杯

飲まんと欲して琵琶馬上びわに催す

酔さいて沙し場じょうに臥ふす君きみ笑わらうことなかれ

古こ来らい征せい戦せん幾いく人にんか回めぐる

これは夜光の杯ならぬギヤマンの吸いのみ、魂をとろかす力もない搾しぼりたての果汁にすぎないけれど、その奥ゆかしくさびた紅は千年をへだてる初唐の色である。なつかしい微妙かおりな薫かおりは駿しゅん馬まいなく大だい宛えんのものである。私は夢想の神薬でもものむようにひと口ずつ口にくくみ、舌に味わって、やがてすっかり飲みおわったときにおぼえず あーうまいと讚嘆さんたんの声をあげた。

七日

朝 トースト三きれ 牛乳一〇〇

事変後バタも紅茶もやめた。自然パンも牛乳もやめることになってから久しい。そこへこのトーストと牛乳だ。バタも人造バタは先生から禁ぜられたので普通のバタだ。まさに醍だい醐ご味みである。先日さきじつの米の味といい、きょうのこれといい、我々が日頃自分の舌を甘やかしすぎて勿もつ体たいないくらいくらいの天恵てんゑを忘れさせてることを思わせる。これからみれば昔荒野

をさまよつて飢え疲れた漂泊の民にとつては食べられるものでさえあればなんでもマナであつたであらう。

きようから特に用便の時だけ起きあがることを許された。寝返りができてからは 起きられたら が次の念願であつた。こうしてらくになると爪つめののびたのが気になりだした。△△さんにとつてはもらつたものの普通のとりかたではとつたような気がしない。私のこの爪を気にする病いは癩かんという古く曖あいまい昧ではあるが同時に多含で適切である言葉でしかない現せない。私が仙人になれない第一の理由は雲にのれないことでもなく、霞かすみがくえないことでもなく、実にこの爪を長くすることが辛抱できないところにある。私は用便のあと勝手に時間を延長して爪をきりはじめた。思いきり鋏はさみの刃をくいこませてぎりぎりまではさんでしまう。さばさばした。垢あかだらけの仙人生活から足を洗つた思いだ。

十四日

午後。御来診。起床を許された。咲き残つた朝顔もおしまいになり、鉢もかたづけられていた。そのためからりとした庭に苔こけがめずらしく青々として、秋海棠しゅうかいどうがさいている。睡蓮すいれんの葉が浮きながら枯れて、すっかり秋だ。はじめて温度表をみる。これは青赤黒で

書きわけられた私の肉体の調子の狂った交響楽である。心臓の打楽、肺の管楽、熱は頭の琴線の絃げんがく楽か。序曲は派手に始まつてるがやがて頗すこぶる単調平板になり、それが「先生」という指揮者の命令によつて突然中止されたのだ。が、早晩終曲の演奏はあるにしても、さしあたりこの曲が未完成に終つたのは幸さいわいなことであつた。

青空文庫情報

底本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月17日第1刷発行

底本の親本：「中勘助全集 第三卷」角川書店

1961（昭和36）年2月28日

初出：「新風土」

1941年（昭和16）年1月

入力：呑天

校正：noriko saito

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

胆石 中勸助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>